連綿のフェルト人形

centurio

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
連綿のフェルト人形

【Ｎコード】
Ｎ５９１１Ｒ

【作者名】
ｃｅｎｔｕｒｉｏ

【あらすじ】
父と娘二人の親子は、とある飲食店街の路地裏で一体の朽ちかけた人形を発見した。娘は父に人形が欲しいと主張し、他人のもので綺麗ともいえないそれを娘に与えるのに父は渋ったが、最終的に折れて娘はボロボロのそれを手に入れた。人形をめぐる父と娘の物語。
※２ちゃんねるの小説家になろう推薦スレにおける企画のお題作品です。

（前書き）

※　縦書きで読むことを推薦します。

この街の薄暗い路地裏で、私と娘は朽ちかけの人形に出会った。

赤レンガの舗装が粋な、メインストリートから少し外れた飲食店街でのことだった。喫茶店や洋食屋など外観からして洒落た店が立ち並ぶこの通りは、彩度を抑えた色の壁のそこここに赤や緑といった原色を多用した装飾が施され、歩く者に欧米のアベニューを歩くかのような錯覚を抱かせた。

週末の昼過ぎのこの時分、街は昼食をどこで摂るか思案する人々でごった返していた。通りを行き過ぎる無数の人々の声が集積し、泡立つ水の中に顔を埋めたような曖昧な雑音へと変じて絶え間なく鼓膜を打った。

私たち二人は幼稚園児の娘の新しい靴を買うため中心街を訪れ、この通りで周囲より一足早く昼食を済ませ、帰宅する途中にあった。購入したスニーカーは娘の幼稚園の指定の種類であり、街中にある特定の靴店でないと取り扱っていない。娘は私が手渡した靴の袋を両手で抱きかかえるようにして持ち、頗る機嫌が良さそうに鼻歌を歌い、スキップ気味の足取りで私の前を歩いていた。

世の中に――、どうでもいいもの、大した意味を与えられないものというのは往々にして存在する。私たちは普段それに気付かない。まして、大切なものだったり、忘れてはいけないことだったり、気にすべきものを多く抱える人ならば、尚更それらに目をやる余裕も割り当てる注意力も持ち合わせないだろう。

本場風が売りのピザ屋と隣のカレー専門店を横目に過ぎ去ろうとしたとき、我が娘ははたと足を止めて私を呼んだ。

「ねぇねぇ、お父さん」

娘は昼でも薄暗くどんよりとした路地裏を見ながら、可愛らしく細い人差し指で何かを指差した。食後だというのに思わず意識が向

くような芳しい料理店の排気が、店内の蒸気を路地へと運んで街の間隙を湿っぽくさせている。
人差し指の半直線上に視線をなぞらせた。そこには、青色の使い古した屋外用ゴミ箱が置かれている。干からびた何らかの汚れがグレーに変色して表面にはびこり、上部のふちから雷霆のように走るひび割れは高さでいうと中ごろにまで及んでいた。
そして、その蓋の上にちょこんと腰を落ち着ける、ある物。娘の指差していたのは、正確にはこれだった。
――朽ちかけの人形。
片目を失い、縫い目が無惨に裂け、腸(わた)が飛び出すように綿が飛び出た、玩具の成れの果ての姿。人形だと思えば、確かに人形だと認識するはずなのに、それは路地裏という人間社会のある種の「陰」に見事なまでに溶け込んでいた。こんなところに、人形などあったらおかしいはずなのに。戦場に人間の屍が広がっていても、戦場なのだから仕方がないといって納得してしまうのに似た何かが、この情景にはあった。
「お父さん、あれ、拾ってきてもいい？」
娘のその言葉に、私は否を返した。このような日陰なる存在など持って帰ったら、我が家で不吉なことの一つ二つ起こっておかしくないように感ぜられた。もちろん、清潔でないという衛生的な懸念や、前の持ち主の思い出を冒涜することになりはしないかという道徳的躊躇もありはしたが、私にとっては前のような迷信的で一見馬鹿馬鹿しいような理由が最も危険なように思われた。
娘はごねた。どうしてもあれが欲しいのだという。これからデパートにでも寄って新しいのを買おうと言ってみても、あれでなければ駄目だと撥ね返された。よもや既に人形の魔力に取り憑かれたのではあるまいかと、心配したものだった。
娘は無邪気だった。どうしてこんなに無邪気でいられるのかと、私も不思議でならない。この娘の母親――誤解を未然に防ぐため付け加えるが、私のただ一人の妻のことだ――が病に侵され他界して

からというもの、私は心のどこかに常に陰鬱とした闇を飼って生きてきた。片親の私はこの娘のために何が出来るのだろうかと、考えること実行することに心を砕いてもきた。

――ここで何をしてやれるのか？

心の水面を鏡面のように落ち着けて考えてみると、ただの人形に「魔力」だなどと随分馬鹿げた発想をしたものだった。見識の狭い子供という生き物にとっては、初めて見たものが一番で、たまらなく良いものなのかもしれない。大人ですら、たまにそう感じることがあるのだ。「昔は良かった」――経験において若輩に引けを取るべくもない老人ですらこうのたまうのだ。初めてのものが、一番良い。

私は、とってきてもいいよ、と娘に伝えた。娘はその場でキャッキャと小動物のように飛び跳ねてから、その朽ちかけの人形へと駆けて行った。

私は仕事で遅くまで帰れない日も多かった。幼稚園の延長保育では、娘が最後の一人であることが少なくなかった。私は人形に一つの役目を担ってもらうこととした。私がいない間、我が娘の遊び相手になってほしい、と。

私は帰宅すると朽ちかけの人形の修復に取り掛かった。まず、この人形をよく観察してみることにした。

表面や髪の部分はフェルト生地、その中に綿を詰め込んでフワフワ感を出した、スタンダードな製法の人形だった。目にはビーズのやや小さいようなものが糸で縫いつけられているが、このパーツを何と呼ぶのかは分からない。

髪は金髪を意識したのか、黄色の細長いフェルトをいくつも縫いつけて出来ている。錦糸卵のように見えなくもないこの髪は肩ほどまであり、男性のようでも女性のようでもあった。服は上下一続きで、オレンジ色のフェルトで作られているが、デフォルメの利きすぎでこちらもワンピースなのかコートなのか着物なのか判然としな

かった。
　いずれにせよ、一目で手作りであることが瞭然と分かった。この人形を作ってもらった人物は、よほど製作者に愛されていたと見える。それなのに、どういった所以あって捨ててしまったのだろうか。それも、ああも理解しがたい場所に。本当に捨たかったのならば、ゴミ箱の中に放ってしまうのが一番早いはずだ。
　……と、人形のディテールを確認し製作者の心情を慮ったところで、裁縫の知識などほとんどない私には何の手の施しようもなかった。中学かそこらでは家庭科の授業こそあったが、その時間は大概やっていない宿題を片付けるための内職の好機となっていたし、たまに真面目に受けて得た知識も、ここ二、三十年の間に小便にでも混じって出て行ってしまっただろう。
　致し方ないので私は文明の利器に頼ることとした。その、人の叡智の生み出せし産物を「インターネット」という。デスクワークで培ったタッチタイピングでキーワードを入力し、タンと小気味よくエンターを打鍵する。
　以下が電子の大海より得た知識と、それによる修理の過程の記録だ。
　まず汚れ落とし。
　洗濯機に放り込んでしまえば楽なのだが、どうやら人形を丸洗いするのはＮＧのようだった。フェルトが毛羽立ち綿は収縮し、直視できない姿になるらしい。そこで活躍するのが「歯ブラシ」と「食塩」だ。乾燥した状態で塩を振りかけてこすることで、フェルト地の汚れを綺麗に落とすことが出来る。
　次に綿の入れ直しとほつれた部分の補修。
　綿を詰めるのはともかくとして、問題はフェルトの縫い方だった。私は布の縫い合わせ方といったら、雑巾に施すような波縫いしか心得ていない。調べると、フェルトの一般的な縫い方は「ブランケットステッチ」といい、一針ごとに糸と布の間に針を通していくのが特徴であるようだ。説明に従って、手に怪我を負わないようおっか

なびっくり縫ってみると、臓物を撒き散らすかのようだった傷痕が塞がり、見た目に可愛らしい縫い目が出現した。

最後に、欠損した片目を補填する。

目玉は透明な黒色の小さなビーズを糸で縫いつけて出来ているが、これは「ラインストーン」と呼ばれる手芸用品の一種で、Tシャツやタンクトップなどに文字を象ったり、携帯電話やポータブル音楽プレーヤーの表面を装飾するのに使われている。

翌日、私は人形を鞄に入れて出勤し、帰りに予め調べておいた街の手芸用品店に寄って同型の部品を手に入れ、帰宅後、娘の見守る中これを修理してもう一つの光を与えた。会社で人形が同僚に見つかり、一時は私の感性を疑われたこともあったが、どれもこれもひとえに娘のためと思ってのこと。この二つの眼で我が娘をしっかり見守ってくれることを、切に願った。

色合いのくすみが失せ、傷ついた箇所を修復され、恐らくは前主人の頃の精彩を取り戻したであろう人形を、私は娘に改めて手渡した。「大事にするんだよ」と一言かけてやると、娘は「うん！」と蕾が花開くような笑顔を向けて快活に返事を返した。

その後、例の人形がどれだけ大切に扱われたかについては、私は様々な具体的事例を以って説明することが出来る。

彼（彼女？）に他愛ない話を聞かせている姿を幾度も見かけたし、仕事から帰ると、人形の前に紙や粘土で作った一通りの「食事」が置かれていたこともあった。一度、学習机の角にでも引っかけたのかフェルトが破れてしまったことがあったが、やっぱり新しいのを買ってあげようかと私が提案すると、亀裂から綿を覗かせる人形をひしと抱いて「嫌だいやだ」と必死に修理を求めた。

その人形でなければいけなかった。それはときに友人として娘と接し、ときに親として心の支えとなった。友人や親が変わってしまって、少しも傷つかずにいられる人間はいない。人形は、遅くまで帰れない父に代わって寂しい娘の相手をし、彼女を見守るという役目を立派に果たしてくれたのだった。

いつまでも娘のそばにいてくれると思っていた。我が家に母親がいない事実は変わらず、私も変える気はなかった。
娘のほうから拒絶される日が来るなんて、まさか人形も思ってはいなかったことだろう。

娘は小学校へ入学し、中学校を経て、高校生になった。
母親の不在が娘の人格形成に問題をきたさず済んだことには、私はほっとしている。メールや電話のやり取りを見ていると、娘に友人が順調に増えているのが分かる。マネージャーとして体育系の部活に参加し、そこから先輩後輩の繋がりも拡大している様子だった。娘は学校というコミュニティの中で問題なく社交性を身につけ、実践し、人々と関わっている。それは私にとって、間違いなく喜ばしい成長だった。
しかしその一方で、娘は友達付き合いに忙しいのか、夜遅くまで遊んで帰宅することが多くなった。高校生の年齢が自立という観点から大きな一線を踏み越えたところにあるのは事実だろうと思われるが、法律的にも実際的にも娘はまだ私という大人の所有物であり、時間帯によっては余念なく保護者の庇護の下に置かれなくてはならない。このことは習得した社交性とその実践である人付き合いの、負の側面だ。
そして私が個人的に気にしていたのは、あの人形のことだった。
いつからか、あの子と人形が一緒にいる画を見なくなった。まれに、開けっ放しにされている扉から娘の部屋を覗けることがあるが、たいてい、人形は部屋の隅の本棚のまた隅っこで埃をかぶり、娘はそれに背を向ける体勢で勉強や読書をしている。誕生日のローソクが増えれば趣向も変わる。それは重々承知しているが、私はこの徹底的無関心の構図に、ふと物寂しさを覚えずにはいられなかった。
最近は、娘よりも先に私が帰ることが多くなった。ある平日、鍵を開けて家に入った私は、予約炊飯しておいた米と出来合いの惣菜

で食事を済ませた後、日頃多忙でなかなか出来ない掃除をしようと思い立った。掃除機を片手に家中の隅々まで歩き回る。リビング、台所、玄関、脱衣所、洗面所、和室、私の部屋、亡き妻の部屋、そして、娘の部屋。

ちょっとした抵抗感を振り払って中へ進入し、ベッドや机の下、出窓の下部の空間、ソファの壁面の隙間などに掃除の手を行き渡らせた。娘が部屋の清潔の維持を怠っているのがありありと分かる。衣類、小物、本などが無造作に散らばり、どこもかしこも埃だらけで、靴下を履いて部屋の中を移動すること以外に床の綺麗になるようなことは何ひとつ行われていないように思われた。

掃除機の中間部分を外し、別のノズルを取り付けて本棚とベッドの隙間に差し込んだ。手元の「運転」ボタンを押し込むと、しばらく埃や紙片を吸い取った後に、掃除機の先が苦しそうな声を挙げて大きめの何かを吸いつけた。怪訝に思って持ち上げてみると、あの人形の胴から下が管の先っぽに埋まっている。私はあわてて人形を回収した。

壊れた個所こそ存在しないが、人形は埃に塗れていた。フェルトのあちこちに絡みつき、むしれどもむしれどもとりきれる様子はなかった。しかしそれよりも、娘の思い出の多くに同席したこの人形が今となってはここまでぞんざいに扱われていることに、私はショックを隠すことが出来なかった。

ただいまー、と階下より気だるい声が聞こえた。私は汚れた人形を優しく包むようにつかみ、しかし憤りを抑制しきれぬ足取りで階段を下った。

「遅いぞ。もう少し早く帰ってきなさい」

時計に目をやると八時を回っている。娘はバッグを乱暴に降ろし、防寒具を投げ捨てると、「うるさいなぁ」と目を合わせることもなく言って階段を上がろうとした。

「人形、本棚の脇に落ちてたの見つけたぞ」

人形を見せつけるその前に、娘の言葉による応酬を受ける。

「お父さん、私の部屋入ったの？　信っじられない！」
年頃の娘は、たとえ所有物をいじられることがなくとも、自分の領域に親の足が踏み入るのを生理的に嫌悪するものだ。これはどんな家でも同じことだろう。
「掃除しただけだ。あんなに散らかして、埃だらけにして。片付けたことがあるのか？　――それから、人形、大事にしたらどうなんだ」
改めて思い出の同伴者を差し出す。娘は敏感すぎるプライバシーをやすやすと侵されて、ただならぬ憤懣を宿していた。それがこのとき爆発したのが、空気の震えで感得せられた。
「私の部屋のことなんか、お父さんに関係ないでしょう！　何が人形よ！　こんな子供っぽいもの、今でも大切にしていられるわけがない！　部屋の隅っこに置いておく以外にどうしろっていうのよ！」
私の手から人形を奪い取り、細い腕の全力を以って床に叩きつけ、険悪そのものの眼差しで私を一瞥した後、階段を駆け上がって行った。人形は大きくバウンドし、その後フローリングを転がって、私にすり寄るように足元で停止した。
私の裁縫技術は拙かったが、きっと娘の心に補われて、今までその形を保ってきたのだろう。人形は――私のいつか直したところだけが壊れてしまった。ラインストーンの目玉の一つは飛び、ブランケットステッチは私の縫ったところだけがほつれ、これまで小さいその身に詰め込んできたいくつもの思い出が流れ出すように、真っ白な柔らかい綿がフェルトの衣から脱落した。
私は人形を拾い上げた。十年ほど前、娘が同じようにあの場所で人形を手に入れた日を思い出させた。ゴミ箱の蓋に乗っていたそれを娘が抱いたあのとき、あまり清潔なものでないとは知りながら、私もどこか嬉しく感じていたのを覚えている。しかし今はひたすら苦かった。苦くて苦くて仕方なく、綿の抜けた人形のように心を空っぽにして、その場に跪き、泣いた。
人形は、元の朽ちかけへと戻ってしまった。それっきり、直すこ

ともなかった。二度と受け入れられないと分かっているのに、直す意味など無いのだった。

娘は大学受験を乗り切り、高校を卒業して進学することとなった。寒さが身を引き新生活に臨む人々を春の暖かさが迎える三月下旬、一人暮らしを控えた娘のため、我が家では慌ただしく引越しの準備を進めていた。引っ越し業者の手配、大学の入学手続き、家具の注文と配送、ライフラインの契約……そして、荷物の仕分けと梱包。

娘の手によって彼女の部屋にある全てが持っていくものと置いていくものとに仕分けられていく。衣類、本、CD、電化製品、生活用品……選んだものを出来るだけ空間が残らないよう試行錯誤しながらダンボールに詰めていく。壊れやすいものは新聞紙などを底に敷いて梱包する。大学生活のお伴にならないと判定されると、「処分」と書かれた別の段ボールへと極めて乱暴な手つきで放り込まれた。

この作業は、娘がその所有物一つひとつに対して、必要か不必要かの答えを出す行いだった。必要なものは未来へ継がれ、不必要なら過去となる。

今、とあるものがさも当然のように「処分」の段ボールへ投げ込まれた。ともすれば、丸めたティッシュをゴミ箱に投げ入れたのかと見間違うほど、そのモーションには迷いがなかった。私は娘の部屋へ少しだけ邪魔をして、そのみすぼらしい玩具を取り上げた。

――思い出が、朽ちてゆく。

片目を失い、胴の裂け目から綿のほとんどを吐き出してしまった、薄汚れた人形。こびりついた埃がフェルトを覆い、著しく色の彩度を落としていた。娘に完全否定されたその日から、これは人形という形を為しただけのゴミになった。

今頃になって考える。どうしてこんなことになったのか。

必要ないから？　ああ、それは、そうだろう。汚いから？　いや、

汚れる前から娘は無関心だった。では、何故、必要なくなったのか？
……そのとき、娘の携帯が鳴った。バイブレーションが三回で途切れるその着信は、メールのものだ。娘は懐から携帯を取り出してさっと目を通すと、こなれた指使いで何行か入力して返信ボタンを押した。仕分け作業中、このようなことが何度もあった。大学へ進学すれば、高校での仲間はほとんどバラバラになってしまう。ここ一週間が、娘にメールを送るような友人と会って、一緒にいられる最後のチャンスだろう。
娘はメールを返信すると、ふっと少し笑顔になった。
「一緒にいられる」――。
そうだ。我が娘には今、一緒にいてくれる多くの人々がいる。今までは、クラスの友人や部活の仲間、先輩、後輩……。これからは大学で、また新たな友人を作る能力があることも、私は知っている。鍵を回して家に入り、独りの寂しさを人形で紛らわすことは、もうない。娘の見る社会は、確実に広がっている。
人形は、娘の成長によって御役を免ぜられたのだった。その果ての姿が、この朽ちかけだ。
仕事を果たしたこの人形を、私はポケットにそっと滑り込ませた。

数日後――。娘は乗車券を、私は入場券を手にして駅の改札を通過した。私はこの日、非常に重大なことを二つ控えた心づもりで一日休みをとっていた。
清掃が完了し、車両の扉とホームドアが開放されると、娘はホームから駆けるようにして乗り込んで、私の目の届くこちらの窓側の席に着いた。
三月末日。新幹線のホームは屋根に覆われているが、開け放された左右からは時節に則った風が吹き込み、私は付近で購った熱い缶コーヒーを握りしめながら両腕で自分を抱くようにして寒さに耐えていた。娘は暖房されているであろう車両の中で一時私から目線を外し、携帯のメールによって友人とのコミュニケーションに興じて

いた。このご時世、相手が隣にいないからといって一切の話が出来ないというわけでもない。ただの文字、されど文字によって今の若者は繋がりを継続するのだ。

車掌が客の乗り込んだのを目視で確認すると、車両の扉がすうっと締まり、それに心付いた娘がメールの手を止めてこちらを見た。間もなく、走行に向けて深呼吸するような排気音が聞こえると、空気抵抗をよく軽減する流線形の全体がゆっくりと前進を始めた。娘は照れくさそうに手を振り、私もそれに振り返した。

新幹線に添うように足を進めながら、手を振り続ける。始めのうちは追いつけたが、十秒もしないうちにそうでもなくなった。金属の塊を時速数百キロにまで到達させる圧倒的加速度に、私は完敗する。娘の姿はやがて、窓が反射する日差しによって真っ白く塗り潰された。

娘が新たな世界に旅立っていく。大学という四年間へ。速度を上げて離れて行く車両の背を、視認の限界まで見送った。ポケットの中では密かにもう一人、私と見るものを同じくする者がいた。彼（彼女？）は満身の創痍を勲章と輝かせて最後の任務を終える。

その日、その足で車を走らせて市街地へと向かった。

とあるデパートのがらんどうな立体駐車場に入り、一階の出口付近に悠々と車をとめてメインストリートを歩いた。平日の昼、街頭には主婦とその子と思しき小学生未満の子供ばかりが見受けられ、私の存在は明らかに周りから浮いている。

錆ついてやや色の黒ずんだ薬屋の看板を目当てにして、メインストリートと交差する見覚えのある通りへと入った。あちらこちら欠けてはいるが未だ上品さの衰えない赤レンガの舗装や、新旧が入り混じって煌びやかというよりは味の出た印象を受ける飲食店の数々が、大きな事件や事故なく順当に光陰をなぞったことを教えて私を迎える。

一度も利用したことのない本場風ピザ屋は、「ＣＬＯＳＥＤ」の

札を入り口にさげて閉まっていた。隣のカレー専門店は、日本人の味覚に迎合したアレンジが奏功したのか、まだ営業が続いていて種々のスパイスの香りを通りの一帯に広げていた。やはり日本人は日本人でしかないようだ。私はピザ屋とカレー屋の中間地点で、改まったように立ち止まった。

早足で過ぎていく通りの人々は、昼飯をピザにするかカレーにするかいやに真面目に悩むおかしな男性がいると思っているのかもしれない。少し観察眼のある人ならば、ピザ屋のほうは閉まっているのに何の煩悩に身を苛まれておるのかと余計に変だと感じただろう。しかし私の本当に用があるのは、二軒のどちらでもない、その間の路地裏だった。

茶に変色した油がねっとりとこびりつく換気扇。埃っぽさが増して日の光のさらに遮られる薄暗さ。しかしこれだけは新しくなっている、艶のある黒色のゴミ箱。前には娘と一緒にここへ来た。雷が中ほどまで落ちたような古臭いゴミ箱はもう無い。それこそそちらがゴミ箱に入っている頃だろう。

私はあれからの年月を勘定した。こういうことをすると、私も歳を食ったなと思う。しかし時を数えながら遡られる思い出が持てることは、きっと良いことだ。良い歳のとり方をしたのだ。……十三年。娘と、こいつと。

黒いゴミ箱の蓋の上に、ポケットから取り出した朽ちかけの人形をそっと座らせた。綿のほぼ抜けたそれは意に反して座るというよりふんぞり返り、だらしなく頭が横に垂れてしまった。

傷ついたその姿は、我が娘の成長の証だった。世界が狭い間だけ友達を演じ、社会的な繋がりが増えていけば、遊ばれず、触られず、軽んじられ、忘れられるようになる。そしていつか捨てられる。人形に、あるべき結果として。前の持ち主の折も、そうだったに違いない。

ここでお別れだな、と声をかけた。この人形が我が家で娘のそばにあったことを、私は忘れはしないだろう。別れとは、この人形の

宿命を解し、その一端の始末を行うことである――それだけのことだ、と自分を納得させ、身を翻し、歩み出した。振り返ることは、しない。

思い出の同伴者が、私から遠ざかっていく。振り返らぬと心に戒めたので、通りから決して眼を外さずにいた。屹と進むべき方へ視線を据える。

娘には別れの言葉すら告げさせられなかった。だから私が二人分言おう。

ありがとう。そして、さようなら。

人の営みの暗がりに、朽ちかけの人形が一体。

掃かれぬ砂塵、整然たるゴミ箱、美食の香り。その中に、それはちょこんと座っている。一瞥までは自然、考え始めると不自然な、不思議な光景だった。

振り返らない戒めが路地裏を出るまでのものと考えていた私は、通りに出て二分ほど歩いたところで立ち止まり、後ろに小さく首を向けた。

比較的質素な身なりをしたとある母親とその息子が、ピザ屋とカレー屋の建物の間を見ながら何やら問答をしている。少年は建物の間を指差し、母親はそれに対してぷるぷると横に首を振り、少年の腕を掴まえていた。しかしあまりの剛毅さにいよいよ母親が折れ、少年は腕を掴む手から解放されて路地裏へと消えた。

その辺で私は面(おもて)を前に戻した。いささかしんみりの度が過ぎたかもしれないと思った。どうやら、人形はもう一巡、繰り返すようだ。

寂しいのは自分一人だけみたいだな、と私はあまりみじめったらしくない自虐を心で呟いた。そして微かに笑い、彼らに背を向けて立ち去った。

（後書き）

２ちゃんねるのお題作品。お題は「朽ちかけの人形」。
何となく厨二な情景が浮かぶ感じのお題なのですが、変に恰好をつけずに直球な感じで勝負してみました。
作中、一度人形が修復されていますが、最後にはまた朽ち果てるので、「戻ってるじゃん！」などと突っ込まずに読んでくださいね。

感想は企画など気にしないで厳しめに入れてください。
思ったことを思ったまま書いていただくのが一番ためになります。

３／１４　前書きを追加、誤字を訂正、ルビの括弧の変更を行いました。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5911r/

連綿のフェルト人形

2011年3月19日12時25分発行